

強者の戦略

こんにちは。国語科の松崎です。湿気と暑さで体調を崩していませんか？夏はまだまだこれからです。以下の問題を解いて、夏に取り組むべきことや、教科ごとの勉強の比重を考えていってみてくださいね。今回は、なじみの薄い歌論です。

次の文を読んで、後の問に答えよ。

俊成卿云ふ、歌とはよろづにつきて、我が心に思ふことを言葉に言ひ出すを歌といふとのたまひ、定家卿は和歌に師なし、心をもて師とすと仰せられたり。⁽¹⁾おほかた姿はやすく心得たるを、人ごとの心には、余所より、遠く求め出すべきやうに存ずる故に大事なり。

この道、神代より始まりて、わが国の風となれり。人と生るるもの、心なく、言葉なきはあるべからず。しかれば、⁽²⁾その思ふことを口に言はんことかたかるべしや。例へば、あら寒むやと思ひ、小袖を着ばや、火に当らばやと言ひ出す、これすなはち歌なり。歌のはじめは、「*あなにえや」と言ひ出し給ひける、これ歌なり。その後、⁽³⁾心に思ふこと多ければ、言葉も多く言ひつらねき。三十一字に定め、句を五七五七七に定めけることは、「*八雲たつ出雲八重垣」の歌より、⁽⁴⁾この文字数くばり聞きよしとて、今に学べり。されば歌の本体とは、ありのままの事をかざらず言ひ出すを本とせり。

それを万葉の末つたより、*曲を詠みそへて歌のかざりとしたるなり。⁽⁵⁾例へば「*ほのぼのと明石の浦」と詠めるがごとし。ただ明石の五文字なるべくは、「播磨なる」と置くべきに、ほのぼのと明らかなと言ふを、言の花のにほひにしたるなり。その時代にも飾らずありのままによめるもあり。⁽⁶⁾人の化粧したると、ただがほなるとのごとし。

(『冷泉家和歌秘々口伝』より)

(注)

○あなにえや——イザナキとイザナミの二神が天の御柱をめぐりながら互いを褒めたたえあつたという感嘆の言葉。

○八雲たつ出雲八重垣の歌——スサノヲノミコトの歌「八雲たつ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」。五七五七七形式の最初の歌として知られる。

○曲——おもしろみ。

○ほのぼのと明石の浦——柿本人麻呂の歌「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」。なお、明石は播磨国の瀬戸内海岸にある地名。

問一 傍線部(1)は、人々の考え方が歌の姿(おもむき)を得難くさせていることを述べている。適宜ことばを補って現代語訳せよ。(解答欄：14センチ×4行)

問二 傍線部(2)～(4)を、それぞれ適宜ことばを補って現代語訳せよ。(解答欄：13センチ×2行)

問三 傍線部(5)はどのようなことを言うのか、解釈せよ。なお「明石の五文字」とは「明石に冠する五文字」の意である。(解答欄：14センチ×4行)

問四 傍線部(6)のたとえば、どのような意味か、説明せよ。(解答欄：14センチ×3行)